

地下水案 突然の撤回 農水相、諫早で表明

【朝日新聞・7月29日】強い懸念に配慮

国営諫早湾干拓事業の開門調査をめぐり、就任後に初めて県内を訪れた郡司彰農林水産相は28日、開門した場合の調整池に代わる農業用代替水源を地下水とする案について、事実上の撤回を表明した。地元で強い地下水案を再考することで事態打開を図りたい考えだが、開門の白紙撤回を求める県側との隔たりは大きく、開門に向けた道筋は不透明なままだ。

「地下水を利用することに対しては、これまでの経験則を踏まえて本能的にも懸念が強いことを感じた」

諫早市の公民館で開かれた県や地元自治体、農漁業者らと農林水産省との意見交換会。予定の2時間を大幅に超えた午後5時40分過ぎ、郡司農水相が突然、地下水案の再考を表明した。

会合後の取材に対し、郡司農水相は「開門を進めるための第一歩の所で滞っているわけだから、新たな検討をしたい」と述べ、海水を淡水化する代替案にも言及した。

新たな提案に対し、中村法道知事は会合後、「地盤沈下する恐れがあると繰り返し申し上げてきたので、地元も一定安心できる部分がある」と評価する一方、「根本的な事態の解決には結びつきにくいのではないかと警戒感を示した。

郡司農水相が今回、踏み込んだ姿勢

を示したのは、来年12月の開門期限に向けた対策工事が進まないことへの焦りがある。この日の会合でも、「来年12月には何らかのことが動き出す。何も出来ず、皆さまの声も生かさないことは避けなければならない」と訴えた。

だが、意見交換会は時折、怒号が飛び交い、県側の参加者からは開門に反対する声ばかり。郡司農水相は「近いうちに2度、3度と来たい」と話し合いを続けていく考えも示したが、開門準備に向けて、具体的な協議に入る事ができるか不透明だ。

また、郡司農水相は、農水省が作業を進めている環境影響評価（アセスメント）について「まとめさせていたで方向で、お話しさせていたで良かった」と発言。環境アセスの最終段階である評価書作成に進む意向も示した。

諫干 「議論の場必要」 開門調査問題で農相

【佐賀新聞・8月1日】国営諫早湾干

拓潮受け堤防排水門の開門調査問題で、郡司彰農相は31日、全開門を求める佐賀県と開門反対の長崎県の関係者が集まり、課題について議論

する場が必要とし、実現に向けて努力する考えを示した。

郡司農相は閣議後会見で、長崎県側の反発で協議にさえ入れない状況を踏まえ、「同じ課題について、テーブルにつくことが大事」とした上で「それが直ちに協議といった形にならなくても、話し合いができる関係は目指していきたい」とした。7月28日に大臣就任後初めて両県を訪問したが、「1回だけではなく、数度うかがい、場合によっては一堂に会して話し合う形になればいい」と述べた。

代替農業用水の確保策で、海水の淡水化も検討していくことについては「技術的によほどの程度の数を造ればいい」とか、タンクの容量、最終的に予算がどの程度になるかなど詰めていかなければ」と話し、既に検討を始めていることを明らかにした。対策費予算が大幅に増加する懸念には「必要と判断した場合は政府内でも協議し、やっていかなければいけないと思っている」とした。



諫干調整池ではアオコの大規模発生が始まりました。主にミクロキスティス・エルギノーサのようです。農業用水取水口でも確認されました。

新たなつまずきの始まり？

【長崎新聞・8月3日】袋小路から抜け出すため、なりふり構っていられないというところか。それとも新たなつまずきの始まりか。国営諫早湾干拓事業の開門問題で7月末に来

県した郡司彰農相は、開門した場合の調整池に代わる干拓農地の代替水源について、地下水以外の案も検討すると表明した。

地下水案発表から1年2カ月。表明を事実上の撤回と捉えれば、あまりに無駄な時間を過ごした。振り返れば開門反対派は、このもたつきこそが狙いだっただろうが、国もあえて無謀な案を提示し、あわよくば開門を遅らせようと考えていたのでは――とうがってしまふ。

例えば地下水調査に反対する住民との関係だ。国は資材搬入の日時を事前に住民に知らせた。「泥棒に入るのを警察を呼んでいてください」と同じ。開門に転換し、はしごを外されたと思っている住民に負い目を感じているにせよ、本気でやる気なんてないと感じたのは私だけか。

会談で「弁解はしない。責任は私が取る」とやる気を見せた農相は、代替水源の一例に海水淡水化技術の導入を挙げた。だがそれは来年12月の開門期限に間に合うのか、高額な費用が反発を招かないのか。新たな、迷路、が待っている気がする。